

『最新現場報告子育ての発達心理学』 清野博子
著

古賀, 倫嗣
熊本大学教育学部

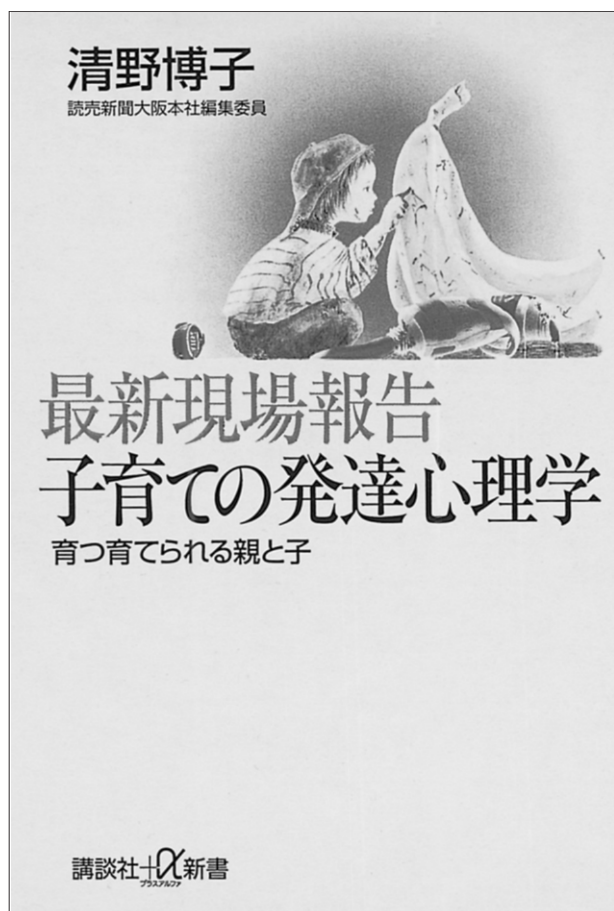
<https://doi.org/10.15017/9038>

出版情報：生活体験学習研究. 3, pp.99-100, 2003-03-01. 日本生活体験学習学会
バージョン：published
権利関係：



『最新現場報告 子育ての発達心理学』

清野博子 著



子育ては、楽しくない？

乳幼児を抱える母親たちから、「不安」や「悲鳴」が噴き出している。「子育てをどのようにしたらいいかわからない」という不安から「自分の子どもを愛せない」という悲鳴まで。長い間、日本では「三歳までは母の手で」という「三歳児神話」が信仰されてきた。

欧米諸国では徐々に否定されながらも、「三歳児健診」という母子保健制度、校長先生が一番好きと言われる「三つ子の魂百まで」ということわざなどに支えられ、今日でもその呪縛は根強く残っている。「密室のなかの子育て」「母子カプセル」という社会的問題は、その帰結である。とりわけ、「こころの袋小路」に追い込まれる「専業主婦」が抱える問題は危機的すらある。

「三歳児神話」の「産みの親」は、イギリスの精神医

学者ジョン・ボウルビィ。彼は、WHO(世界保健機構)の要請を受け、第2次世界大戦で両親を失った子どもたちの身体的・精神的な発達について研究を行い、1951年、その成果を『母性的養育と精神衛生 (邦訳：乳幼児の精神衛生)』として出版した。そのなかで、乳幼児と母親との間の親密で継続的な関係(「母性的愛撫」)が欠如した場合、乳幼児の身体的、知的、情緒的、社会的発達に悪影響を及ぼし、成長後の逸脱行動(非行)や神経症(ヒステリー)などのパーソナリティ障害の原因になるという「母性剝奪」理論を提示したのである。ボウルビィ自身は、その後1969年に刊行した『母子関係の理論』で「父子関係」にも注目し、比較行動学の視点を加味して理論を修正したものの、「母子関係」を重視する考え方は、とりわけ日本では、母親の育児専念を求める「母と子の絆」論として一人歩きしてきた。

本書は、乳幼児の「発達の現場」に寄り添いながら、「三歳児神話」にとらわれた子育ての問題点を明らかにし、「育つ育てられる親と子(副題)」という視点がいかに大切かを訴える、発達心理学の最新の研究を要領よくまとめている。著者の清野博子さんは、読売新聞大阪本社編集委員を務める新聞記者。子ども問題のほか、女性問題、高齢者問題などを中心に取材活動を続けている。「読売新聞(大阪)」教育面に2000年4月から2年間連載されたものの一部に加筆のうえ、刊行されたものである。

本書は11の章から構成されているが、その構成そのものが「乳幼児の発達」の時間軸であり、各章のタイトルはそれぞれの発達段階のキーワードとして受け取ることができる。ここでは、前半部分に絞って、そのタイトルと、その発達課題の視点を研究者の「生の言葉」で引用することで紹介に代えたい。

第1章 「抱っこ」が語る大きな意味

「抱きぐせがついている」と言われて、「完璧な育児」をめざす母親はどうしたらいいか、からだも心もこわばって「煮詰まった」状態になった。そんな母親の場合は・・・。

「子どもが笑顔で、機嫌がいいとき、ああ、かわいいと抱き上げ、ほおずりをするのはだれにでもできます。泣いて、ぐずって、どうにもならないマイナス状

態のとき、物理的に抱くだけでなく、気持ちの上で、文字通り抱きかかえ、なだめ、落ち着かすことができるかどうか」が大切です。そういう母親への最高の贈り物が「三ヶ月微笑」。「この笑顔は、乳児の社会性の発達を示すと同時に、親になることを、もう後戻りできないところに押し出す強い力を持っている」と、鯨岡峻さん（京都大学教授）。

第2章 人は関係の中に生まれてくる

生後二～三か月になると、大人が笑いかけると、赤ちゃんは笑う。ところが、大人が途中で急に笑うのをやめてしまうと、赤ちゃんも変な顔をし、ついには泣き出してしまふ。なぜ、生まれて間もない赤ちゃんに、顔の表情がわかるのだろうか。

「なぜかはわかりませんが、そういう身体を持って生まれてきたということです。」

「人間はひとりではなく、関係の中に生まれてくるということなのです。最初は無力な個人として発達していった、やがて人々と社会的な関係を結ぶのではなくて、生まれたときから、他者を予定している。親やきょうだい、周囲の人たちと関係を重ねる中で、個としての‘私’を意識し始める」と、浜田寿美男さん（花園大学教授）

第3章 内面に生まれる新しい発達の力

生後四か月の赤ちゃんを持つ母親の悩み。「以前のようには笑わなくなった」「声がでなくなった、大丈夫でしょうか。」

これは、子どもの内面で「質的な変化」が起きている証拠。生後四か月ごろの子どもが相手の顔をじっと見るのは、あやされて笑うという受身の関係ではなく、自分が主人公になって、自分から人間関係を結ぼうという主体的な力が、子どもの内部で準備されつつある証拠なのである。

「子どもって、自分で自分をつくり替える力を持っている。新しい自分をつくる努力をしている。この子、こんなにがんばっているのだと思えば、こちらも励まされますよね。」「おとなの生活があって、そこに子どももいる。その中で次の発達のための意欲が育つ。それが生活そのものの持っている子育て力、教育力だと思うのです」とは、白石恵理子さん（滋賀大学助教

授）。

とはいえ、この当たり前のことが、そうではない。「子どもの生活の部分が弱くなっている」からである。

田中昌人さん（京都大学名誉教授）は、乳幼児の「新しい発達の力」を3つに区分している。受け身で笑うのではなく自分から相手を見て笑う「四か月目」、自我が芽生える「十か月目」、そして経験の中でのめごとを学ぶ「五歳半」の3段階である。

「同時に、人間はやり直しがきくということでもあるのです。いろいろな問題を持っていたとしても、新しい力の誕生によって、自らをつくり替え、再出発できる。そういう見通しを持って子育てや教育をし、その知恵を人類共同の財産にしていくことが、次の世代への責任ではないでしょうか。」

この後も、「自我が育ち、拡大する（二歳児のぐずぐずは大変）」、「『心』に出会う（四歳児がひとつの転機）」など、発達にともなうキーワードが続く。子どもだけではない。

「親になることで、おとなも育つ」、子どもとおとなとの「共育」の視点である。

「子育て」について、これまで私たちは科学的に見つめるということあまりしてこなかった。その背景にあるのは、「子育ては母親の天職」であり、「母性本能の発露」であるという先入観にほかならない。だからこそ、父親が「子育ての主体形成」という課題と向き合うことはなかった。「子どものために・・・」ではなく、「子育て神話」を押しつけられる母親の側に立って子どもの発達とは何かを明らかにする本書は、こうした課題を社会的に担うシステムづくりに向かう。すべての公立保育園を「地域における子育て支援センター」に位置づけ、各園に地域担当保育士を配置した大阪府吹田市の試みは、そうした取り組みの1つである。

最後に、1970年代から日米の子育て比較研究に従事してきた、柏木恵子さん（白百合女子大学教授）の言葉で結びとしたい。

「実際に子どもを育てる営みの中で、人間の力を越えたものの存在や知恵があることに気づき、いのちへの畏敬を抱く。これは、親になることを通して学ぶことの中でも、今日、非常に重要なことだと思います。」

[講談社+α新書、2002年、880円]

(熊本大学 古賀 倫嗣)